

第一六章
なんとか担当大臣

山本が大家に視線を移すとうつぶく。そんな山本に大家が首をかしげる。

「どうしたのじゃ？ 何を遠慮しているのじゃ」

「ご高齢の方に少し失礼なことを言おうとしています」

「わしゃ、気にせん。それに山本さんの発言は大概正論じゃ。忌憚ない意見を伺いたい」

ここで田中は握っていた手を少し開く。

「大家さん、いいんですか。山本さんは結構辛辣なことを言いますよ」

「そんなことはないわ。まず少子化の話をしましょうか。総じて先進国では出生率が低く寿命が延びる傾向にあります。一言で言えば少子高齢化人口減少社会です」

山本は刺激を和らげようと話の順番を変える。

「出生率がなぜ低いのでしょうか。もちろん婚姻率が低いというのが直接的な原因ですが……」

「それに晩婚じゃ。複数出産の可能性が低くなるし高齢出産は母胎に負担をかける」

「それでは結婚問題を考えましょう」

「独身が多いなあ」

「山本さんも田中さんも独身じゃ。なぜ結婚しないのじゃ」

「山本さんとなら結婚したい」

テレビの中からげんこつが飛んでくる。直ちに大家が田中に助言する。

「よほど耐えなければならんぞ」

「それでもいい」

2 発目を凌いだ田中が山本のお株を奪うように話を戻す。

「頼りない男が多くなったんだ。僕がその見本。逆に女性はキビキビしている。そうそう。少し話がそれますが大学入試の合格点は男子より女子の方が高いらしい。これはかなり問題ありだと思っただけだ」

大家が割り込む。

「そのとおりじゃ。情けないことに男子はゲタをはかせてもらって合格しておる。特に医学部がひどいらしいぞ」

「在学中の成績も女子が上。卒業式で総代を務めるのはほとんどが女学生らしい」

「大学で頼りない男子を見れば結婚する気にはならんろう」

ここで田中がしよげかえる。

「僕なんかその典型だから山本さんに相手にされるはずないなあ」

山本が口を開く前に大家が一つ咳払いしてから低い声を出す。

「少子化対策担当大臣は何をしておるのだ？ 東大卒首席卒の優秀な女性を任命したと首相が言っておったぞ」

山本がすぐさま否定する。

「ほとんど何もしていません」

「えーっ」

「女性の有権者も当てにしていけないようで、そのような大臣がいることすら知らない女子が多いようです」

「広報がたりんのじゃ」

「女性が頑張らなければ少子化は防げないのでは？」

田中がテレビをのぞき込む。

「そのとおりです。でも各省庁や民間企業では真逆のことをしたり放置したりしています。大家さんの言うとおりまず入試で男子にゲタを履かせます。こんなことをする大学に文部省は見えぬふり。世論の沈静化を待っているような態度です。同じようなことがいくらかでもありません。就職しても女子にはお茶当番をさせる。管理職にしない。マタハラ、セクハラを推奨する……」

田中がテレビ画面の山本の口に蓋をする。

「そんなこと言ったら、また記者会見場から追い出されてしまう」

「そうじゃのう。少子化対策担当大臣が具体的な手を打っていけばそれなりの結果が現れているはずじゃ。○○担当大臣というのは結局何をしているのかよくわからない得体の知れない大臣ということじゃ」

山本が田中の手を振り払うと大家に頷く。

「昔、大臣や官僚の不祥事と財政難で国民から大批判を受けて省庁の数が半減されたことがあったわ。そこで副大臣ポストを作って政治家を慰めようとしたけれど……」

「末は博士か大臣か、というぐらいだから政治家は大臣になりたがるものじゃ」

「でも希少だから価値あるんでしょ。大学院をたくさん作りすぎたから博士なんか価値がなくなつて誰も偉いと思わなくなつた」

「そうじゃな。わしが若かつたころ、友だちに博士がいたが結構偉そうにしていた」

「でも省庁が減ると大臣ポストも減るから益々価値が出てくる」

話が少し横道にそれたので山本が不満そうにほつぺたを膨らませてから話の続きに戻す。

「……何でもそうだけれど『副』とつくと価値がガタンと下がるの」

「大統領と副大統領では重みが全く違うなあ。そういえばらく前、野党が政権を奪還したときスーパーコンピュータに予算を付ける段になって経済産業省にクレームを付けたついたなあ」

『世界一に拘らなくてもいい。なぜ二番だったらダメなのか？』というクレームじゃつたな。わしもそう思ったが……」

「一番と二番では大統領と副大統領ぐらいの差があるんです」

「たとえ話が飛躍しているように思うぞ」

大家は承服しかねるという態度を示すと山本が不満そうにしゃべる。

「話がすぐ横道に入ってしまうわ」

「ごめんごめん」

田中が謝る。

「何も話だっただけ」

「副大臣の話よ」

「そうだった。確か副大臣ポストを作っても余り歓迎されないという話じゃった」

何とか山本は機嫌を直す。

「そこで何か新しい施策を目玉にして……というより国民の目をそらすためにくすぐるようなことを言っておいて、たとえば『ハンコなんて煩わしいですよ』と提案して国民の反応を伺いながら『ハンコ撲滅担当大臣』というポストを作る。当然国民は賛成するから新しい大臣が生まれるの」

「なるほど」

「そして『ハンコ撲滅担当大臣』ではかっこ悪いから『行政改革担当大臣』と命名したの。今は『ワクチン供給担当大臣』という名前がぴったりの仕事をしているけれど」

「なるほど……」

「……ほかには？」

大家が答える。

『オリパラ担当大臣』という大臣もいるぞ」

「この大臣の仕事内容ははっきりしているけどオリパラが終わったら任期も終わりです」

「ほかに少子化対策担当大臣のように何をしているのかわからない大臣はいないのかなあ？」

「とっておきの大臣がいるわ。『一億総活躍担当大臣』というのはどう？」

「またもや大家が口を挟む。

「なんじゃそれは？」

テレビ画面に見るも無惨なシーンが流れる。大型トラックが通学中の児童を次々とはねて田んぼに突っ込む映像だ。

「むごい」

田中も大家も目を背ける。

この朝起きた事故だった。酒を飲んだ運転手がハンドルを切り損ねて数人の児童が死亡、重傷を負った。歩道がない片側一車線の見通しのいい県道で起こった。前々から地元住民が歩道の設置や通学時間帯の車両通行禁止を要望していたが、行政側は何らの対応をしてこなかった。「県道と言うこともあって元々スピード感がない政府は一通りのお悔やみを述べただけでそれ以上の反応を示さなかったのう」

「でも首相が動いたわ」

「事故現場に出向き花を捧げて『二度とこのようなことを起きないよう全力で対策するよう関係各省庁に伝えた』といつもながらの心のこもらないコメントをしていたな」

「またもや話がそれだしたので山本が咳払いをしてから叫ぶ。」

「一億総活躍担当大臣！」

「先ほどと同じように大家が吐く。」

「なんじゃそれは？」

山本はいい加減にしてという表情を浮かべながらもいつの間にかそばにいる「一億総活躍担当大臣」に扮した逆田を紹介する。

「私が一億総活躍担当大臣です。このたびは飲酒運転の犠牲者になった児童およびそのご両親を含む遺族の方々並びに関係諸方面の方々にお悔やみ申し上げますとともに、大変なご心配及びご迷惑をおかけしたことを心よりお詫び申し上げます」

不祥事が起こったときに必ずでてくる通り一遍の言葉を聞いて田中が憤慨して山本を差し置いて大臣に突っかかる。

「このコロナウイルス感染でほとんどの国民は活躍できないけれど、いったい大臣は何をしているんですか」

「いろんなことをしております」

「どんなことじゃ？」

少しうわずつた声で大家も尋ねる。

「まず先に今回のような悲惨なことが起こらないようにしなければなりません」

「飲酒運転撲滅担当大臣の仕事では」

「いいこと言いますね。私とその仕事を兼務しております」

「だったら今まで何をしていたのですか。具体的に説明してください」

「今回の飲酒運転で児童が巻き込まれて死亡したという事件がクローズアップされました。と言うことは逆に言いますといかに同様の事件が少ないか証明されましたことになります」

田中の怒りが急速に頂点へと向かう。

「私一億総活躍担当大臣が適切な対処をしていたのでこのような事故は起こりませんでした。ですから今回の事故は非常にまれなケースです」

ついに田中は大声を上げる。

『『まれ』も『くそ』もない。絶対あつてはならない事故だ！』

「もちろんそうです。このコロナウイルス感染で酒の提供が制限されているからか、かえって酒を飲む人が増えています。その中で起こった事故だと理解しております」

田中はテレビの中にいる大臣の胸ぐらをつかもうと手を突っ込むがかなわない。すると大家が唾を飛ばして怒り出す。

「飲酒が悪いことは百も承知。問題は道路じゃ。なぜ通学路に歩道がないのじゃ。歩道に車が

突っ込んで児童が死亡した事故は毎年のように起こっているぞ！」

「それは予算の問題で私の責任ではありません」

田中と大家は怒りの余りゼイゼイと息をするだけで言葉が出せない。仕方なく山本に視線を移すがなぜか反応しない。

「児童の通学問題は文部省や各地方自治体の教委委員会、国道は国土交通省、県道は各都道府県、飲酒運転や交通事故は警察庁の……というように縄張りがあります」

大家が最後の力を振り絞るように叫ぶ。

「縦割りじゃなくて縄張り争いなのか！ まるでヤクザの世界じゃ」

「確かにヤクザの世界かも知れませんが、いいヤクザもいます」

「いいヤクザ？」

「いいヤクザというのは気質かたぎに迷惑かけないヤクザです。縄張りを整備してその中で市民が安心して暮らせるように日夜頑張っているのです」

「はあ？」

田中が呆れかえる。ここでやつと山本が一億総活躍担当大臣に質問する。

「大臣は具体的にどういう仕事をするのですか」

「今回の事故を徹底的に詳細に分析して検証して二度と同じような事故が起こらないように努力します」

「今まで努力が足りなかったから同じような悲劇が起こっているのではないですか」

「今回はこれまで以上に高い緊張感をもって対処します」

この答えに山本は一瞬言葉を失ってしまうが何とか立て直す。

「……もちろん今回のような事故は金輪際起こらないようにしなければなりません。しかし、この事故対策が『一億総活躍』とどういう関係があるのですか」

「あきらかでしょう。このような事故がなくなると一億もの国民が安心していろいろなことに打ち込んで活躍できることになります」

すでに田中や大家はこの大臣から視線を外して、もしこのテレビにリモコンがついていたらチャンネルを変更していただろう。残念なことにリモコンはどこか、テレビ本体のどこにもボタンやスイッチは付いていない。鋭く切り込む山本ですらだらしく開いた口元を閉めることもできない。

「それではこれから事故現場を視察しに行きます。緊張感を持ってしっかりと私の仕事ぶりを取材してスピード感を持って報道してください」

山本はもちろん大家も田中もあつげにとられて大臣を見送る。

現場の道路が画面に大写しされる。田んぼの中を通るまっすぐな片側一車線の見通しのいい道路だ。歩道はない。真ん中に白線だけが引かれている。道路というのは中央が少し高くなっ

ている。雨水が溜まらないように両脇に排水するためだ。この道路の場合両側が田んぼだから道路脇の舗装は浸食されて夏になると草ぼうぼうになっている。事故当時と異なるのは道路脇に献花台があつて花や果物などが置かれていることだった。

「人ひとり歩くのがやつとだなあ」

通学時間帯を除いてこの道を歩く人はほとんどいない。道幅が狭いので乗り合いバスは走っていない。地方の公共交通機関は赤字経営になるので廃止されることが多い。結局自家用車が唯一の交通手段となる。そのほとんどが軽四輪車か小型車だからなかなか道路は拡幅されない。そんな中トラックなどの大型車両もこの道路を利用する。

「欠陥道路じゃ」

ここで一億総活躍担当大臣の顔がズームアップされる。

「そこで私の出番となるのです」

山本がすかさずインタビューする。

「なぜこのような欠陥道路を放置してきたのですか」

「そうじゃ、そうじゃ」

山本への大家のメールを潰すかのように大臣がしれーっと答える。

「私が放置したわけではありません。だから私はこんな道路をなくすための仕事をしているのです」

第一六章 なんとか担当大臣

ここで田中がわめく。

「絶対『なるほど』なんて言わないぞ」

第一六章 なんとか担当大臣